生協クリニックのべおか
のこぼれ話

クリニック全景

宮崎県延岡市に２００９年１月に宮崎民医連４番目のクリニックとして開設されました。

延岡市は、宮崎市から９０キロ北に位置する人口１１万の地方都市で大手企業が事業展開する工業都市としても有名です。かつて人口の６割が関わっていた大手企業が経営する医療機関がありました。その為に新規参入が難しかった事や、その後その大手企業の経営状況から医療機関が撤退したことにより、延岡市の医療体制整備が遅れてしまった経緯があります。新規開業もありますが、高齢化による閉業もあり、診療科の空白もあるなど、現在も医療体制は充実しているとは言い難い状況です。

生協クリニックのべおかは、地域を知って医療のニーズを知る、まずは相談しやすい外来を目指して取り組んでいます。在宅医療も地域の在宅医療の実態を知り、そして生活実態に見合った医療の提供に取り組んでいます。延岡市の特定健診や企業健診にも力を入れ、病気の早期発見早期治療に結び付けられるように日々活動しています。
併設するデイサービスそれいゆ、隣接する居宅介護支援事業所それいゆ・訪問看護ステーションそれいゆ・ホームヘルプサービスそれいゆとも連携し、患者の高齢化の進む中でよりその人らしい生き方をサポートできるように取り組んでいます。

スタッフの皆さん

私の好きな本

宮崎生協病院
内科医師　永友　英之

「言語学バーリ・トゥード」（1・2）

（川添　愛 著）

内容を一言で表すと、日常生活やスポーツや芸能などのいろんな場面で出てくる事象を言語学の専門的考察を踏まえながらエッセイ風にしてまとめたもの（一言、と書いてしまったため、ムリヤリ一行）。著者の川添は東京大学で言語学の研究をしており、ときどき小説も書く、研究者兼作家。その川添が東京大学出版会の広報誌に書いたものをまとめて本にしたものである。「言語学」という堅苦しい単語に「バーリ・トゥード」という明らかに難しそうな単語が並ぶタイトル（ついでに言えば、しかも東大刊行）から、とても難しい本をイメージすると思うが、実際は（冒頭の写真を）見ての通り、かなりおちゃらけた本である。そもそも、バーリ・トゥードとはポルトガル語で「ルールを最小限にした格闘技の一ジャンル」という意味で、つまり「何でもいい」（私の解釈）ということ。著者のプロレス好きから名付けられたようだ。

目次を見ると、扱っているテーマは「ＡＩは『絶対に押すなよ』を理解できるか」「あるあるネタはなぜ人を笑顔にしがち♪なのか」などという芸能に寄せたテーマから、「言葉に引導を渡すもの」と読まないと何が書かれているか分からないテーマ（ちなみに、死語についての話）、「日本語は本当に『非論理的な言語』なのか」などの、専門家の見解をとても知りたいテーマなど様々である。

第一話は「『こんばんは事件』の謎に迫る」というもの。これは１９８０年代のプロレスの話で、当時トップレスラーだったアントニオ猪木のところに突然、他団体のラッシャー木村とアニマル浜口が殴り込み、リング上でアントニオ猪木を鬼の形相でにらみつけ、一触即発のムードとなった時があった。そんな中、ラッシャー木村がマイクを握った。どんな言葉が出されるのか、皆が固唾を呑んで見守っている。そのときの彼の第一声が、なんと「こんばんは」だった。皆がズッコケたようで、「こんばんは事件」と言われているようだ（私も知らなかった）が、著者の川添は、なぜ「こんばんは」が観客に不適切だと思われたのか、ということについて言語学を駆使して深く、おもしろく分析していく。紙幅が足らないので（それとネタバレにもなるため）詳細は書けないが、毎回こんな感じで書かれている。言語学者だけに、著者の言葉選びのセンスが抜群で、私と同じ年生まれ（卒業大学も一緒。どこかですれ違っているかもしれない）のため、出てくる話がどれも身近なものばかり。なので、（残念ながら）若い人には合わないかもしれないし、何と言っても生活の役には立たない（と思われる）が、私はとても好きな本だ。まあ、私もこういう本ばかり読んでいるから現実から……（以下略）。

この本の中に「今書いているものが死ぬほどつまらなく思えた瞬間」にどう振る舞うか、という問題が出ている。私にとって、今がまさにその瞬間なのだが、選択肢としては「１．にげる　２．たたかう　３．しらべる　４．やすむ」の四つと書いている。今の（〆切に追われている）私は、結局にげる（書かずに投げ出す）こととやすむ（時間をおく）ことはできず、ひたすら戦い、調べ続けるしかできないことを思い知らされただけだった。今度からは逃げたり、休んだりできるよう、うまくやっていきたいと思う。

なお、川添の著書で、もう少しわかりやすいものとしては、「世にもあいまいなことばの秘密」というものがある。こちらは、「冷房を上げてください」→「温度上げるの、下げるの、どっちやねん」などもっと身近な例を扱っているし、巻末に練習問題もあるのでとっつきやすいと思われる。

この本を読んだ後にガソリンスタンドに寄ったとき、タイヤの宣伝文句があった。「最高の低燃費」と書かれてあった。「これって最低の燃費のこと？　最低の燃費と書くとイメージ悪いから、だいぶ苦労してこの宣伝文句を思いついたのかな」、などとこの本のおかげで、いろいろ考えて楽しい思いをしたが、別にタイヤを買うわけでもなかったので、やはり生活の役には立たずに終わってしまった。